

三房。

〔北條五代記^八〕物見の武者ほまれ有事

聞しは昔、或老士物語せられしは、われ小田原北條家に有て、數度の軍にあひたり、略中 天正十三年の秋、佐竹義宣と北條氏直、下野の國に在いて對陣をはり、東西に旗をなびかす、氏直はたもとより、物見を五騎さしつかはさる、さかひ目へ乗出し、敵の軍旗をはかる所に、其内に山上三右衛門尉、波賀彦十郎二騎は、其所の案内をよく存する故に、や、さかひを一町ほど乗過し、高き所へ乗上る、敵の草是を見、はちの如くおこつて、二騎の武者を取まきぬれば、網にかゝる魚のごとし、三右衛門敵跡をば取切れ、敵地たりといへ共、北方をさしむちうて、希有に其場をのがれ、野原をはせすぐる所に、草荊共にげゆくを追たほし、飛でおり、首一つ取、敵あまたをひかくるといへ共、馬達者なる故、大山へ乗上、嶺を下り、みかたの地にはせ付たり、彦十郎は、敵にかこまれ落べきかたなく、敵陣まぢかく乗入、堤づたひに道有を兼てしり、それより南をはるかに駒にむちうて落行を、陣中より騎馬おほく乗出し、前後左右を取切、或は乗かけ討んとすれば、むちに鎧をもみそへ、二間三間馬をとばせ、或はよつてくまんとか、れば、馬に聲をかけてはせすぎ、數度あやうく見えしが、終にうたれずして、大河へ乗入、馬をおよがせ、こなたの岸に付ぬ、氏直兩人のはたらきの次第をきこしめし、御感な、めならず、諸侍かんたんせずと云事なし、やがて兩人を御前にめされ、仰出さる、をもむき、山上三右衛門尉敵あまたにかこまれ、戰場をはせ過るのみならず、敵一人討捕、大山をこえ歸陣する事、心剛にして、馬も達者たる故、軍中のほまれ比類なき高名なり、扱又波賀彦十郎敵に取こめられ、よん所なきが故、敵陣へ馬を乗入、堤づたひの順路を知て、南をさしてはせ過、其上又陣中よりあまたの騎馬に出あひ、數度難義にをよぶ處に、焚噲をふるひ、かれらにも討れず、大河へ乗入、敵みかたの目をおどろかし、こなたの岸に馳付事、前代未聞の剛者也